

Title	擬態と天職 : スターリン時代文学史から
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学論集. 9 p.149-p.166
Issue Date	1993-09-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79607
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

擬態と天職

—スターリン時代文学史から—

武藤 洋二

МИМИКРИЯ И ПРИЗВАНИЕ

Из истории русской литературы в сталинское время

МУТО Ёдзи

Сверхгосударственная сталинистская власть дает много ценных материалов для прояснения традиционного вопроса “поэт и власть”. Мы прослеживали судьбы поэтов сталинского времени в взаимоотношениях литературы, искусства и власти. Настоящая статья тематически связана с нашей монографией “Судьба песни: Ахматова в истории народного страдания/Токио, 1989/.

Где “дежурят страх и Муза в свой черед”,—как ни парадоксально, для поэта и художника неизбежна и даже необходима своего рода мимикрия в отношении к власти, чтобы быть искренним в своей работе.

Мы стремимся прояснить вопрос о возможности остаться художником, не будучи ни рабом-функционером, ни “врагом народа” в период после коллективизации писателей в 1934 году.

Во второй главе мы разрабатываем эту тему, сопоставляя примеры из России под гнетом сталинизма, нацистской Германии и милитаристской Японии в 30-ые годы нашего века.

序章 体制悪の私的利用

1. 信号

権力機構のなかにいる職業的弾圧者だけでなく、庶民の一人一人がおたがいに潜在的加害者にな

っていく仕組みができあがったとき、恐怖が日常生活を支配するようになる。

スターリン権力は、体制がための合言葉として「警戒心」を選び、全国民に対敵教育をおこない、万人の目と耳が万人にたいする警戒装置になるような時代がやってきた。警戒心の不在は犯罪とみなされ、それだけで降等、免職、投獄される。

警戒心は、ふつう密告によって発揮される。警戒心のうえつけは、全国民のつながり、きずなを密告網に変えようとする政治的仕掛けである。肉親にたいする密告も奨励される。親を密告した子供は、その善行をほめられる。密告は、いまわしいものという伝統的観念から国家への義務という市民的感情へと高められる。

密告が義務であれば、密告不履行という罪が生れる。夫が「人民の敵」として逮捕されたとき、妻が夫のことを密告しなかったとして逮捕されることがある。夫が無実で、密告する材料がない場合ですら、妻が密告不履行者として罪人になるのも、スターリン体制下では、異常なことではなかった。

密告の義務と密告不履行罪への恐怖とが人を政治警察の情報提供者にしていく。情報の提出先は、内務人民委員部でなくてもいい。スターリン個人から職場の上司にいたるまで無数の受取り手がある。情報は、それが完全なでっちあげであろうと、一人だちし、力をおび、生身の人間におそいかる。「すべての政治的権利を保障した」と称するスターリン憲法は、政治的ビラにすぎないから、ソヴェト人は近代的司法制度の外にあり、とびかう密告に対して無防備であった。

政治警察の官僚用語では、密告は「信号」という表現にかわる。政治犯罪をつくり、自から作成した脚本にもとづいて人間狩りを行っている内務人民委員部は、常に信号を待っている。信号は、脚本家たちの構想を助け、筋書きの材料になり、事件拡大の起点として利用される。

密告は、司法制度のなかでめんどろな点検をうけるのではなく、保安機関によって政治的に使いみちがきめられるから、それは、迫害、弾圧、粛清に奉仕することになる。

労働者が割りあてられた生産高を気にし、たえずその数字の重圧下にあるように、抑圧機関は、「人民の敵」の逮捕数によって成績が評価された。数字が低ければ、警戒心の欠如とみなされ、責任者の死活問題になる。だから、彼らは信号を待ちかまえていたのである。

この状況下では、隣人のとるにたりない失言を密告して、彼を「人民の敵」にすることができる。一片の紙、一言の告げ口によって、憎い奴、嫉妬の相手、ねたみの対象を国家権力の手で始末してもらうことができる。国家の暴力装置を自分個人の敵にむかって作動させることが誰れにでも可能なのである。密告によって巨大な装置のボタンをおす。これは、老婆の指一本で、あるいは、舌先三寸でできることであった。『ブラウダ』を読みながら、ここに書いてあるのは全部が全部ほんとうだとはかぎらない、と夫がいったのを妻が密告し、彼女は、いやな夫からの解放と財産の一人占めという二重の幸せにひたることができた。この例は大海の一滴である²⁾。

これは、体制悪の私的利用である。個人的利益のために体制悪が悪用されるのである。

国家権力が人間を隷属させ、使役し、恐怖漬けにする悪い体制は、人間から悪の可能性をひきだ

す。それは、ふつうの条件下では実現できないよこしまな、いやしい欲望に活路をあたえる。もし人間が私利私欲のない生物であったら、スターリン時代の密告網すら空洞だらけであっただろう。一方のきわみには国家権力の悪、他方には善い民という完全な両極化はありえない。いやおうなしに体制悪に加担させられるだけでなく、自発的に積極的に悪に乗じる者が頻出するのである。

体制悪の私的利用は、体制悪に奉仕し、それを増強する。

密告によって囚人がうまれると、囚人は、死刑になる者をのぞいて、収容所で労働力となるから、密告者は国家へ奴隷を献上したことになる。このさい「人民の敵」は、官民共同でつくられたのである。

一片の権力も持たない庶民が他の庶民にたいして恐怖の発生源になることによって、個人独裁、一党独裁下の闇が真の暗闇となった。

2. 肖像

こんな話がある。女狐が生れて初めて百獣の王ライオンに会ったとき、死ぬほど恐いおもいをした。次からは死んだふりをすることにした。二度目に会ったとき、心臓がはりさけるところだった。三度目では、心臓がひどくどきどきしただけである。四度目では、木の葉のようにふるえただけですむ。九十九回目になると、ただ目を細めただけである。百回目では、笑顔をつくって王様とじゃれつこうとするしまつた。こういうわけで、百獣の王は、臣下のあいだにあまりひんぱんに姿をみせないのである。民草が王様のことを考えただけで、死ぬほどの恐怖にとらわれなかったら、そんなもの統治とはいえないからね。

女狐は、王様に会うまでに、さんざんうわさを耳にしている。一度も会わないでも、狐は、恐怖の支配をうけていた。狐にたいしては、申し分のない統治がなされていたことになる。

慣れ親しむことが恐怖を弱めるなら、なぜ恐怖政治下でスターリンの肖像がいたるところに飾られたのか。

自分が恐れられていることは、スターリンにとって、都合がいいだけでなく、快よいことであった。スターリンに会ったある男が緊張と恐怖から失禁し、尿が床をつたったとき、スターリンは怒るどころか、まんざらではなかったといわれている。女狐の前に初めて姿をみせたときのライオンのような力を、スターリンは持っていたのである。

しかし、この力だけでは独裁を末永く維持することはできない。恐怖は、自己防衛的な反応として奉仕をひきだすだけである。それは、無償の、無私の、積極的な、生産的な行動の原動力にはならない。恐怖から行われるのは、なによりもまず、自己保存のための、不自然な、不本意な、無理な行為である。恐怖心からの奉仕、奉公は、利己的な反応のわくをでない。恐怖がおよばないところでは、奉仕は止まる。だから権力は、恐怖の空白地帯ができないように、たえず恐怖を植えつける。手をはなせば、得るものがなくなる。恐怖政治は、きわめて非効率的、非能率的な統治である。

このさい、効率性とは民衆の自発性である。自発的な積極的な生産活動を生みだす装置が必要に

なる。恐怖によって民衆を囲いつつ、スターリンは、抑圧のない、物のあふれる、自由な未来社会を保証する父親になろうとする。あかの他人の独裁者でなく、父親の顔をした独裁者であろうとする。その顔がいつでもいたるところで民衆を見つめているように、肖像画、写真、全身の銅像、石膏の胸像が大量につくられる。政治的美学によって点検され、修正された顔が、公共の場から家庭にいたるまで、毎日の新聞から教科書にいたるまで登場する。

学校では子供たちに、スターリンは父であると教えられる。幼い子の中には、その意味が分らず、家にいる実父でなく、スターリンが父親だと理解するものがいた。父親より父スターリンを上位におくことによって、子供たちはスターリン体制の構成分子になる。

国家権力に抗しうる最後の集团的結合は、家族である。スターリン体制は、この砦へスターリン自からを父として入れることによって、家族のきずなを相対化する。国家権力が父をよそおって浸入する。

独裁の貫徹のためには、独裁者が国父の高みに立っているだけでは十分ではない。実の父より大切な存在として各家庭に入らなければならない。父という仮面をつけたライオンが、家族の団欒の場に祭られる。

肖像の父に忠誠をつくして、実の父を密告する子供がでてくる。父親を密告し破滅させたパヴリク・モローゾフ³⁾の全国にばらまかれた肖像が、子供たちを同種の行動へと誘う。小さな密告者は讃えられ、そのうちの代表が英雄として全国に紹介され、政治教育の教材にされる。

権力者、政治家は、子供を抱きあげたり、子供たちにかこまれているところを写真にとらせ、大衆に見せる。これは、子供の純粹さ、素朴さにあやかって、善良で信頼できる人間であるかのような印象をあたえようとする政治的人格づくりの常套手段である。

1936年1月27日、ブリャート・モンゴルの六才の少女ゲーリャ・マルキーゾヴァは、クレムリンでスターリンに花束を贈った。スターリンは彼女を抱きあげた。花と笑顔の少女とほほえむスターリンからなる一枚の写真ができた。『ブラウダ』にのったこの写真は大きな役割をはたすことになる。

少したってから、彼女の父親は、他の高位高官と同じく、「人民の敵」として処刑された。父スターリンと讃えられるこのライオンは、ゲーリャにほほえんだあと、彼女の実父を喰い殺したのである。母親も囚人になり、自殺した⁴⁾。みなし児になったゲーリャには、スターリンが唯一の“父”になった。ゲーリャを抱いて父を演じるスターリンと殺された実の父とは、“父”と父との関係を表わす典型例である。

『父』と題されているアルカージイ・クレシヨーフのスターリン讃歌では、若い父親が娘に、スターリンは私の父だと語る。

彼こそ私の父

そうすべき時がきたら

自分の血の全てを彼に捧げよう⁵⁾

父の肖像がはんなりするなかでこのような類の詩がたくさんつくられた。吸血鬼の像に献血の誓いがなされたのである。

肖像には政治的役割が課せられているので、それは分身的待遇をうける。肖像の人格化は、独裁者の神格化を強める。

権力者の肖像には、したがって、不敬罪的な防禦と警戒の装置がつけられる。

生身の独裁者が神格化される時、その像はひとりでに神像あつかいをうける。戦前の天皇の「御真影」を典型として、神権政治的統治下やナチスが支配したドイツのような一党独裁下の最高権力者の肖像は、庶民の家の居間にかけられている場合でも、政治的あつかいを要求する。それが自分の私有物であっても、自分の一存で処分することはできない。スターリンの肖像をそまつにあつかうと、刑事犯にされる。一枚の絵や写真が人の一生をだいなしにするような力をもっていた。この力を私的に利用して、体制悪の受益者になるものもでてくる。

スターリンの肖像をめぐる多くの密告がなされた。紙が常に不足していたこの国では、新聞紙は包紙にも便所紙にも使われる。スターリンの写真がのっている新聞で魚をつつんだ者、それを持って便所へ入った者が通報される。スターリンの写真に石をなげた男の子はテロリスト⁶⁾として逮捕される。

ある劇場の用度係長は、スターリンの胸像を舞台裏へしまうと、顔を壁にむけて置いたので、10年の刑になった⁷⁾。ここでは、スターリンの胸像は、芝居の小道具である。舞台では、それは、当然恭しく安置されていた。幕がおりてからもそれを神像としてあつかい続けなかったので、10年の収容所ぐらしになった。

掃除婦がスターリンの肖像にむかって、「国民がどんなめにあっているか、良く見えるように目をふいてあげよ」と云ったのを密告され、10年の収容所行きとなった⁸⁾。

スターリンの顔の複製は、取扱厳重注意の危険物であり、猛毒であり、そして、疫病神である。したがって、スターリンの肖像を凶器として利用することもできる。

アゼルバイジャン医科大学の外科講座主任であったオシマン教授が還暦をむかえたとき、助教授が紙につつまれた大きなものをお祝のしるしだといって、教授に手わたした。オシマンが包のまん中を両手で持つと、底があいて、中身が床に落ちた。床の上には割れたスターリンの胸像がころがっていた。助教授は最初から割れた胸像を包んでおいたのである。その夜、その場にいた全員が逮捕され、教授と妻は、それぞれ3年、子供たちとお客にはそれぞれ5年の刑がいいわたされた。罪名は、反革命活動である。助教授は主任になった⁹⁾。

これとは全くちがった利用方法もある。刑事犯のなかには、胸にスターリンの顔を入れ墨しているものが少なからずいた。彼らは、銃殺されるときに胸をはだけたら、射たれないですむだろうと考えていた¹⁰⁾。警備兵が銃をむけたので、スターリンの入れ墨を見せたら、難をのがれた者もいる。

疫病神を守護神に変えたのである。

1938年12月、すでに囚人であったシェラーモフは、ある事件をでっちあげる材料として逮捕され、内務人民委員部の現地駐在官のところへ連れていかれた。その執務室に名札がかかっている。

上級駐在官 死¹¹⁾

政治警察の勤務者は、職務上、あるいは、復讐をさけるために、偽名を使うことが多かった。死は職業的変名である。それは、自分でつけた名であるから、仕事の性質への自覚、末端の権力者の精神構造をあらわしている。

駐在官の部屋ではスターリンの肖像が壁の全面を覆っていた。独裁者の巨大な像を背にして執務する死神は、警察国家としてのスターリン体制を象徴している。しかし、この光景は、全体図にはなりえない。なぜなら、政治警察で公務している死氏の姿だけがあって、スターリンの無数の肖像のそばで獲物をまちかまえている民間人の群が見えないからである。

3. 逃走

娑婆でなく、「人民の敵」の世界で体制悪の私的利用がおこなわれるとき、それは、国家の暴力装置の操縦者による権力乱用という形をとる。

囚人の大群を少数の警備兵によって管理するため、射殺によるおどかしが日常化していた。囚人が、許された場から一步はみだせば、警備兵は合法的に射殺することができる。囚人が隊列をくんで行進しているとき、列の内部が許された場であり、列からはみだせば、禁止区域へ足をふみいれたことになる。「左への一步、右への一步は逃走とみなされる。警備兵は警告なしに射つ」——この注意が労働現場へ出発するさい毎くりかえされるので、囚人たちは「お祈り」と呼んでいた。

射殺は許されるだけでなく、奨励される。逃走しようとした囚人を射殺すれば、警備兵は、「警戒心の発揮」を評価されて、休暇や報奨金をもらう。警備兵は、ソヴェト人として対敵教育をうけてきたうえに、自分たちが相手にしている者の大多数は「人民の敵」であり、殺人犯や強盗や詐欺師よりも国家にとって有害であり、ファシストであるとふきこまれている。囚人は人間でなく敵であるとたたきこまれて、警備兵たちは、精神的動揺、道徳的抵抗なしに射てるようになっている。

番外の休暇や小づかい銭かせぎに、逃げる意志のない囚人を逃走者として射殺する可能性を制度そのものが与えている。

国家のために殺すことと自分の利益のために殺すこととは、ほんの少しの細工上のちがいになる。ちょっと頭をつかえば、射殺体とひきかえに休暇がもらえる。逃走していない者を逃走者にしてあげるのは、無から罪をつくることで利益をひきだすスターリン体制全体の仕組みの正当で正常な一部である。

長い囚人生活をおくったシェラーモフによれば、逃走をはかったという口実で囚人があまりにも

ひんぱんに射たれるので、隊列をくんで行進する前に、囚人たちは、「後手でにしばってくれ」と要求したのである¹²⁾。両手を背中にくくられていたら、走ることはできず、逃走者にしたてられずにすむからである。このような自衛手段が必要になるほど、囚人たちはこの種の危険にさらされていた。

すんでのことでこの手の餌食になるところだった作家アナトリー・ジグーリンによると、「腰かけにするから、あの丸太をもってこい」「あれは立入り禁止区域にあります」「かまわん、許可する、行け」、行くと射たれる——これが「典型的で月並みな例」である¹³⁾。

古くからいる囚人は、このことをよく心得ていた。ある日労働の場所へ囚人たちが到着したとき、警備兵たちは、棒ぐいを打って、かこみをつくった。ここから外の全世界が囚人たちにとって立入り禁止地帯になる。「あの木を切ってくれ。じゃまになって道が見えん」と兵の一人がとつぜん云う。この命令の裏にあるものをとっさに察した班長が、「ジグーリン、外へ出るな。殺されるぞ」と叫んだ。警備兵のたくらみは失敗した。「このような幸運な結末はまれであった。」¹⁴⁾

子供もねらわれる。子供の囚人には手ごろがくわえられたと書いたソルジェニーツィンに対して、ゲーリー・パーヴロフという図書館員が、子供時代をトムスクの労働補導所¹⁵⁾で囚人としてすごした経験から異議をとなえている。

「子供を殺した警備兵にはいかなる咎めもなかったばかりか、殺した子供一人につき、『警戒心の発揮により』報奨金と番外の休暇が与えられた。」¹⁶⁾

倒れている子供は敵である。対敵教育をうけている権力の末端分子にとって、敵は者ではなく、物である。殺された少年囚は、狩りの獲物である。

労働と寒さと栄養失調で死が日常化している所では、この種の殺人も、多くの中の一つ、公的殺害群のなかの私的変種であり、逃亡者にしたてあげる仕事は、娑婆で「人民の敵」をつくりだす行為の変種にすぎないから、極悪として突出することはない。これは、体制そのものの巨悪によって誘発された犯罪である。警備兵にとってそれは役得であった。

ナチスのユダヤ人収容所でも同じことがおこなわれた。休暇にありつくためにユダヤ人を脱走者といつわって射殺したドイツ兵は、ユダヤ人皆殺し政策の一端を私的に実行したのである。

4. オレーシャ

人が人にたいして加害者になることが極めてかんたんであるばかりか、自動的に加害者になってしまう仕組みと仕掛けがあったスターリン体制下で、加害者にならないことを生きる姿勢にした者がいた。加害者にならないためには、体制悪の私的利用を自分に禁じなければならない。体制悪に寄生しないことが基本的条件になる。

文学、芸術、学問の世界では、内容、形式、題材にわたって厳しい統制があり、それからはみ出した者にたいする批判、弾劾、追放の仕事を自分の専門よりも熱心におこない、天職への没頭よりも権力への奉公を優先させる者たちがでてくる。彼らはその働きに応じて多かれ少なかれ特別待遇

をうけ、スターリン体制の受益者となる。

全社会的な抑圧状況の下で、半ば職業化したこれら摘発者たち、弾劾者たちの目と耳が自分の専門分野のいたるところにある。多少とも非順応主義的な姿勢をとるのは、しばしば命にかかわる。このため、考えていることと信じていることと、書かれたこととの間に大きなへだたりのある二重生活をおくることが時代の常識になる。嘘、擬態、あいまいさ等の形をとるこの二重性そのものがすでに体制悪への寄生的対応である。

ところが、加害者になるまいとする積極的な姿勢は、被害者にされまいという防禦的姿勢と結びつかなければ、スターリン時代を生き抜くことはできない。活字の世界での「人民の敵」狩りからのがれるには、それなりの二重性が必要になる。専門を放棄したり、時代が変わるまで一言も印刷しない方法をとらないかぎり、この二重性がつきまとう。

加害者にも被害者にもならず、スターリン時代を生きぬこうとした作家ユーリイ・オレーシェを事例にして、天職を守る方法と天職の運命を文学、芸術と国家権力との相関のなかで追求したい。

第一章 作家の集団化

1. 改造

労働に苦しんできた人類に、労働が快楽となる社会を贈る共産主義の目的と精神にそう人間改造法として、肉体労働による「きたえ直し」がソヴェト刑事抑圧の中心におかれた。スターリンの指令で政治警察がつくった脚本にもとずいて「モスクワ裁判」を演出することになるヴィンスキイ¹⁷⁾は、「大粛清」のひそかな準備の時期に、資本主義国とソヴェトにおける囚人のあつかい方の根本的なちがいを強調して、監獄ではなく労働で犯罪者をたちなおらせるソヴェトの矯正労働施設は「実際に矯正的であり、真に労働的である」¹⁸⁾と誇った。しかも「この労働は、ソヴェト権力と社会主義建設との特殊性と結びつくなかで、無と屑から人びとを英雄に変える魔法使いとなる」¹⁹⁾。

人を英雄に変えるどころか、市民を囚人に、政敵を死者に変えてきたヴィンスキイは、英雄誕生、人間改造の典型的な場として白海バルト海運河の建設現場をあげる。1929年からいっせいに始まった農民集団化の最中、1931年から33年にかけて白海バルト海運河が建設された。運河を政治犯、刑事犯に掘らせ、運河建設の過程そのものが社会主義的人間改造の場だと宣伝された。これは、囚人労働という使いすての労働力によって建国の基礎工事を行うことを、人間改造という社会主義の美点だとなえて、経済的利益と政治宣伝との一挙兩得をねらうスターリン体制の仕掛けの一つである。

牢屋の代りに労働による再教育というそれ自体たいへん人間的な方針は、犠牲者を前提にした国造りの過程で、監獄より恐ろしい収容所をうみだすことになった。社会主義建設のたこ部屋となった矯正労働収容所に、「ソヴェトにおける労働は、名誉、栄光、勇気、英雄主義の行為である」という言葉がかかげられた。これは、「以前は恥ずべき、つらい重荷だとみなされていた」労働が、「名

誉、栄光、勇気、英雄主義の行為」へと変ったという、資本主義的労働と社会主義的労働を対比した文からとられた。筆者はスターリンである。この対比が、監獄と矯正収容所との対比に重なる。

現実にある惨状には一切ふれることが禁じられたまま、この名誉と栄光と勇気と英雄主義を宣伝するために作家や詩人が動員された。

白海バルト海運河の工事現場だけでなく、集団化と穀物のとりあげが行われている農村へ、大工場群の建設地へ彼らは送られ、あるいは、自から向かった。社会主義建設から何を創作するかによって、作家や詩人のふところぐあいから生命の安否までが左右される時代が始まっていた。

2. 乞食

文学団体を解散させ、文学と芸術のさまざまな潮流を止め、文学を国営化するためにソヴェト作家同盟がつくられた。創立大会は、1934年8月17日の晩から9月1日の晩まで二週間にわたって開かれた。

農民集団化の流血をとまなう強行策に反対した者たちすべてを屈服させた「勝利者」、詩人マンデリシタムに「百姓殺し」と呪われたスターリンへ大会は挨拶をおくった。

「わたしたちの武器は言葉です。この武器をわたしたちは、労働者階級の闘いの武器庫に加ええます。社会主義の建設者たちを教育し、何百万の人びとの心に気力と自信とをうえつけ、彼らの喜びとなり、彼らを全世界文化の真の継承者に変えるような芸術をわたしたちは創りたいと願っています。

わたしたちは、自分たちの芸術が、我が国でも外国でも労働者階級の手の中かで信頼できる確かな武器になるように、闘っていきます。わたしたちは、全世界の革命文学の仕事を見張っていくでしょう。

親愛なるヨシフ・ヴィサリオノヴィチ、わたしたちの師であり、友であるあなたへの挨拶から、わたしたちのこの歴史的な一日を始めます。」²⁰⁾

独裁者への挨拶が、「あなたを生んだ階級、全世界の勤労者の幸福のためにあなたを育んだ党、万歳！」でしめくられると、全員が起立し、「同志スターリン、万歳！」の叫びがひびきわたった。

建国の犠牲者たちに背をむけて拍手している代議員たちのなかには、自分の目で農村の惨状を見てきた者が少なからずいた。しかし、彼らは、人肉を喰うまでに追いつめられた農民や、餓死者を見せないため窓におおいをして走る汽車や、耕やし手がなくなって雑草におおわれた畑について書かないだろう。52人からなる大会幹部団の一員としてゴーリキイ、ジダーノフ、レオーノフ、エレンブルクなどと共に雛壇にならんでいるパステルナークの心の中にも地獄の光景が傷となって残っていた。

「30年代のはじめ作家のあいだに一つの運動が occurred——新しい村について本を書くため資料集めにコルホーズをまわり始めたのです。皆と歩調をあわせたかったので、わたしも本を書く

つもりでその種の旅行にでかけました。

そこでわたしが目にしたのは、いかなる言葉でも表現できません。それは、あまりにも人間ばなれした、想像を絶する悲惨さ、あまりにも恐ろしい災いなので、まるで抽象的なものになったかのように、意識のわく内におさまらないほどでした。わたしは病気になりました。丸一年というものの眠れませんでした。」²¹⁾

建国の人柱、国造りの手段にされた人間へどのような姿勢を保つか、創作世界のなかでそれがどのような役割をはたすかによって、作家や詩人たちの歴史的立場が大きく左右される。パステルナークはスターリン体制からうけた精神的な傷を『ドクトル・ジヴァゴ』や発表不可能な挽歌や悲歌へ昇華させる。これに反して、犠牲者をうみだす仕組みや刑吏や弾圧者たちへの讃歌を書いて、才能の不足を時流への便乗によって補い、人生の成功者になる者が次から次へと出てくる。

ユーリイ・オレーシヤは、8月22日に登壇した。社会主義についての熱唱のなかでオレーシヤの声は、一種の不協和音であった。しかし、彼の発言は大きな拍手につつまれた。なぜなら、作家たち、芸術家たちの心のなかでわだかまりとなっているものを、政治状況にさからわないように工夫しながら、たくみに表現したからであり、抵抗と自衛とを根底にしながら、スターリン指導下の社会主義建設の大合唱に和したかのようなむすび方をしたからである。

オレーシヤは、かつて自分になされた批判を逆手にとって論をすすめる。六年前に書いた自作『羨望』の主人公カヴァレーロフが共産党員の批評家たちから、「俗物でとるに足りない奴」だといわれた。しかも、主人公は作者自身だと彼らは指摘した。カヴァレーロフは、作者オレーシヤの目で世界をとらえたのだから、オレーシヤという作家の世界認識の能力が、とるに足りない、つまらないものということになる。自分の内なる宝物だと思いこんでいた芸術家としての世界把握の能力が、宝どころか、「貧しいもの」だということになった。すると、作家としての自分は、その社会的必要性からいえば、乞食ということになる。オレーシヤは、投げつけられた非難を利用して自分を乞食だと定義し、文学、芸術は社会主義建設事業の一端であれという要求に、下から、低位置からたちむかう。

「時は、社会主義的産業をつくりだす第一次五ヶ年計画のころでした。これは、私の主題ではありませんでした。私は、建設現場へ行き、工場で労働者にまじって生活し、それを探訪記に、いや長篇小説にすらすらすることもできたでしょう、しかし、これは、私の主題ではなかったのです、私の血管から、私の息ぶきから出てくる主題ではありませんでした。この主題のなかでは私は真の芸術家ではなかったのです。私は、嘘をつくことも、つくりごとですませることも、しょうとおもえばできたでしょう。そのさいには靈感とよばれるものがともなわないでしょう。私には労働者という類型、英雄的革命家という類型が理解しにくいのです。私はそういう人間になれません。

これは、私の力の、私の理解のおよぶところではありません。だから、これについて私は書いていません。私は、たじろぎ、自分は誰れにも必要でないし、芸術家としての自分のもちまえをいかすところがないと考えるようになり、このため、乞食という恐ろしい形象、私をだいなしにすると

ころだった形象が私の内部に生まれ育ったのです。」²²⁾

「乞食」は、芸術的に世界を認識する能力のとぼしい人間から、文学の分野で社会主義建設にとりくむには不適格な人間へと具体化される。社会主義建設の文学戦線における落後者としての「乞食」は、しかし、意にそわないこと、心にそぐわないことは書かないと主張している。これは、その存非が芸術にとって真か似非かの別れ目になる基本的条件の擁護である。これは、書きたいものと書いたものが別物になる二重性へ転落することを拒否している。「乞食」は、失格者という自己卑下の擬態をとったあたりまえの芸術家のことである。この「乞食」は、だから、「芸術家はだれしも書くことのできるものしか書けないのだ」²³⁾と居なおるのである。

オレーシァは、自分を社会主義の建設者に対比させ、その距離を強調する。建設の英雄と「乞食」とが対極化される。

「工場を作っていた人びと、建設の英雄たち、農村を集団化した人たちは、私にとって不可解な、私を乞食に変えてしまうように思えたたぐいのことをすべて行っていたのです、この人たちは——彼らに栄光あれ——私とはかかわりのなかった²⁴⁾驚くべき活動によって、国家を、社会主義国を、祖国を創った、このことが大切なのです。」²⁵⁾

オレーシァには、社会主義建設より、それにたずさわる人間像が大切である。彼は、建設を建設者に代えて、建設から人間へと移動する。

「この国家には若い第一世代が成長しています、ソヴェトの若者が育っているのです。芸術家として私はこれにとびつきます。」²⁶⁾

オレーシァは、狭い、直接的な、むきだしの政治的要求から身を守り、作家としての身を守る。

「私個人は若い人たちについて書くことを自分の課題にしました。登場人物が精神的な課題を解決していくような戯曲や小説を書くでしょう。共産主義とは、経済的なだけでなく精神的な組織であり、共産主義のこの側面の最初の体现者は若者であり若い娘であるという確信が私の心のどこかにあるのです。」²⁷⁾

建設と建設者との区別が、共産主義の経済的な面と精神的な面との区別をうみだす。オレーシァは、建設という経済面と、建設者という精神面を意図的に切りはなすことによって、自分のために人間という広い領域を獲得しようとする。オレーシァは、これによって国家権力による文学と芸術の狭隘化のたがから我が身をぬこうとはかる。これは、政治にたいしていかなる否も公言せず、敵にも批判者にも逃亡者にもならないで、「書くことのできるものしか」書くまいとする立場を守っていく試みである。

この姿勢で書くことを、オレーシァは、「乞食」からの脱却によって表現する。社会主義建設現場では「乞食」だが、人間をえがく仕事場では作家である、と公言する。

「わたしは乞食になりませんでした。自分が持っていた富は無事でした。それは、草や空焼けや色彩のある世界はすばらしく、それを悪くするのは金の力、人間を支配する人間の力である、という知識のなかにあらわれている富なのです。金の力が支配していた時には、この世界は、実体のな

い、はかないものでした。今や、文化の歴史のなかで初めて、これが実体のあるあたりまえのものになったのであります。(嵐のような拍手)」²⁸⁾

「この世界」とは、文学と芸術がとりくむように要求されている狭い政治的人工世界ではなく、その制限と要求から自由な、ありのままの世界であり、自然である。これは、オレーシャが「乞食」になって肩身の狭いおもいをしなくてもいい場、いいかえれば、「乞食」だといつわる必要のない場である。オレーシャは、現実には、「この世界」をソヴェト権力から守りとうろとしながら、形式的には、「この世界」がソヴェト権力によって「金の力」、ブルジョアの支配から解放されたという讃辞で発言をしめくくる。

ソヴェト作家同盟結成という作家の集団化の儀式にのぞんで、オレーシャは、集団化のすき間を自分の生存圏にすると前もって権力者と同業者に通告しておいたのである。

3. 反応

「乞食」への転落とそれからの脱却によって組立てられたオレーシャの弁明的宣言は、労働補導所の囚人たちに一種の錯覚をあたえた。8月30日にグラーツフという名の元犯罪者が、5000人の囚人を代表して挨拶をおこなった。彼は、社会主義社会の新しい人間をえがくことが、作家たちの中心課題であり、その新しい人間、社会主義建設の英雄たちが今われわれの目の前で育っていくと前おきしたうえで、人間改造について語る。

「農村では、かつての零細な私有者がコルホーズ運動を通じて、新しい社会の建設のための活発な闘いにくみこまれていくのが分ります。こういうことがおこるのは、我が国で労働が解放され、創造的になり、労働が恥ずべき行為から、スターリン同志の表現によれば、名誉の、栄光の、勇気の、英雄主義の行為へと変ったからであります。

社会主義的労働の創造力を最も明らかに示すのが、わたしたちの労働補導所です。創造的労働へ引きいれられたかつての泥棒、刑事犯は、自分にむけられた信頼と人間的なあつかいに接して、偉大な時代の熱心な参加者になります。だから、われわれの補導所について書いていただきたいと願う権力があるのです。」²⁹⁾

「今のところ補導所はソヴェト全体で十をこえます、そこでは、何万人もの前科者の犯罪者たちが自己改造をおこなっています。」³⁰⁾

「あなたたち、『魂の技師』³¹⁾もまたソヴェト権力の勝利に感化されて自己改造をしています。

つい最近、補導所の仲間がラジオで作家大会の発言を聞きました(うちの補導所には受信装置がちゃんとつくられていて、2000ほどの受信器がつけられています)。

同志オレーシャが、自分の人間改造について話したとき、仲間たちは、笑いながら云ったものです、『おれたちだけじゃなく、あんな人たちまで自己改造をやっているってことだ!』³²⁾

オレーシャの発言がこのようにうけとられたのは、論理が時代の文脈のなかでたくみに組立てられていたからである。

体制の精神の反映として宣伝された労働による人間改造が、時とともに労働だけになり、社会主義的教育というたてまえと経済という実質とに分裂する。これに呼応するかのように、個人の人間改造も二重性をおびる。公的な批判をうけた作家が、自己批判という人間改造を演じることがあたりまえの起死回生策になる。自己改造がカメレオンの生態に属することになる。

オレーシャは、カメレオンにならないために発言したが、そこには、「乞食」から非「乞食」への自己改造をよそおった、時代と体制にたいする一種のたくらみがあった。これを自己改造とそれに類似の積極的な行為ととる者もいれば、そこに警戒すべき異端的なものをかぎつけた者もいた。

オレーシャの発言は、強い拍手でむかえられたが、その発言の非戦闘性、非党派性に警戒心をいだく者がいた。作家ニコライ・ボグダーノフは、オレーシャがえがく決心をしたのは「オレーシャの若者」であり、「われわれの時代の若者」ではあるまいと指摘し、そのたぐいの古い青年像の作者たちに闘争を宣言する。

「ユーリイ・オレーシャ、あなたの心情の告白を歓迎するが、しかし、われわれの時代の主人公を貧弱なものにしたり、別のつくりものの主人公に代えたり、彼から血肉と熱い社会的情念とを奪おうとするすべての者とあらゆる試みとにたいしてわれわれは闘うであります。われわれの時代の若者が非党員であったことなど決してない³³⁾、このことを覚えておきなさい。これは、血で洗われた革命の野に育った超階級的な馥郁たる花ではなく、妥協をしらない闘士であり、全世界がソヴェトになった時代のソ連邦英雄³⁴⁾であるかもしれません。」³⁵⁾

ボグダーノフがたとえとして花をもちだしたのは、オレーシャの「草や空焼けや色彩のある世界」を指すためであろう。オレーシャの守ろうとする創作の舞台が、英雄、闘士の活動舞台でないことに警告が発せられたのである。

職業的弾劾者である劇作家ヴィシネフスキイも警告する。

「注意深く聞いていただきたい。我が国の一連の作家は——とくに我が友ユーリイ・オレーシャにいいたいのでありますが——未来に関する抽象的な水晶なみに透明な建設構想のわく内にいるのであります。これはお利口なことである。彼らは、花や愛、無階級社会にたいしていただく歓喜、こういった主題をとりあげます。この主題は、我が国の文学でますます盛んになる一方であります。これに何か新味があるなどと思わないことです。」³⁶⁾

「我が友オレーシャとそのあとについていく皆さん（というのは、オレーシャは一流の芸術家だから彼のような人間のあとについていく者、まねをしだす者が必ずでてくるからです）、あなたたちは、水晶や愛や優しさなどについて書いている。一方われわれの方は、すぐれた銃をいつも使えるようにしておき、いざという時に出头する登録場所をよく知っておかなければならない。これは有益であり不可欠なことでもあります（拍手）。」³⁷⁾

これは、「仲間」と「異分子」との区別である。大会の代議員たちにとっても、この仕切りが死線になる日は、目前にせまっていた。

1934年は、政争の最終決着としての大粛清の下準備の年である。作家大会の一ヶ月前、7月10日

には、この任務にたえられるように政治警察が改組、強化されて、ソヴェト内務人民委員部がつくられた。疑いのない政敵にたいする絶滅的弾圧だけでなく、独裁権力の永遠化をねらった民衆にたいする予防的弾圧の準備が気づかれないように、この年は、大同団結をよそおうことになった。スターリンは、数年後に殺すことにしているかつての論敵たちにも、実権を奪いつくしたあとで任務を与えている。作家大会でブハーリン³⁸⁾が『ソヴェトにおける詩と詩学および詩作の課題について』、ラーデク³⁹⁾が『現代世界文学とプロレタリア芸術の課題』という、それぞれ長時間にわたる重要な報告を行ったのは、その政策のあらわれである。ブハーリンが報告を終えると、まもなく悪魔のように呪われることになるこの革命家、理論家、経済学者に、満場総立ちとなって熱狂的な喝采を贈った。

落ちめのブハーリンが作家大会で重要な役割を演じたことは、スターリンによる寛容の擬態であり、代議員たちのなかにはそれを真の寛容だと錯覚した者もいただろう。オレーシャの発言も、この状況下では、批判があったとはいえ、抹殺的な判決は受けなくてすんだのである。

9月1日、大会の最終日に101人の理事がえらばれた。候補者名簿は、スターリン個人の指図によってつくられた。名簿には、スターリンにとってこのましくない者がまじっていた。それは、スターリンが最大限に利用しようと考えていたゴーリキイにたいする妥協の産物である⁴⁰⁾。大会は、この幹部名簿を満場一致で承認した。ゴーリキイを筆頭にヴィシネフスキイ、パステルナーク、エレンブルクなどが入ったこの指導集団にオレーシャは選ばれなかった。

20名からなる統制委員会には、パーベリ、マルキシ、フォルシなどと共にオレーシャも選出された。議決権をもつ代議員377人、議決権をもたない準代議員220人からなる集団のなかで、オレーシャは、中堅幹部の地位をもらったことになる⁴¹⁾。

4. パステルナーク

オレーシャは、祝典の場におりたった一羽の白い鳥であった。あたりまえの芸術家であろうとして、彼は、棲息と活動の余地を少しまわりくどく少し遠まわしに、要求した。彼は、時流にのって時めくことも、自分の天職を手段化することも拒む姿勢をとろうとする。

この立場は、スターリン時代を通じて、人間としてあたりまえにふるまうことのできたまれな例であるパステルナークの発言と共鳴しあう。あたりまえとは、たとえば、読んでいない本の筆者を弾劾する文書に署名を求められたとき、他の作家や詩人が読みもしないのに署名しているなかで、自分一人、私はその本を読んでいないからと署名を断わることである。このあたりまえのふるまいが、執筆禁止や投獄などの不利益と危険をとまなう。あたりまえであることが、しばしば命にかかわるような時代に、あたりまえに自然に生きようとしたパステルナークは、8月29日に短い発言をし、「自分の個性を状況の犠牲にするな」⁴²⁾と語った。恐怖に裏うちされた強制と命令によって動く機構、組織は、たくさんのカメレオンの棲息場所になる。パステルナークは、作家や詩人がソヴェト作家同盟員となり、一人ではなく一員となった時に、警告を発したのである。これは根底にお

いて、オレーシャの発言の真意、ねらいと通じあう。

パステルナークは、もう一つ警告する。

「人民と国家の大きな暖かさにつつまれているので、文学界のおえら方になってしまう危険性があまりにも大きいのです。」⁴³⁾

このそつのない表現の裏には、創作に専念する代りに、組織内の機能をはたすことによって出世し、小権力者になっていく「機能人間」がのさばってきたという状況がある。「機能人間」の群が、独裁権力という巨体のなかで器官化し、文学、芸術の分野でのスターリン体制化をおこない、それを支え続ける。

あらゆるたぐいの国家権力を憎悪したマクシミリアン・ヴォロシニンは、権力の汚ない仕事を請け負う者を呪った。

政治は汚ない業

こいつに必要なのは

実務的で

血も

死体販売も

汚物買付けも厭わない奴ら……⁴⁴⁾

「汚ない業」を手伝う者は、体制悪から利益をひきだす者である。

印刷、出版から創作のための出張、休暇、別荘、病気の治療まで国家がめんどろをみる。いいかえれば、作家同盟は、思想だけでなく経済生活の全般にわたって国家の支配下にあった。これが「暖かさ」である。一たんお上にたいして否といえ、この「暖かさ」は、すぐさま冷たさに変る。「暖かさ」は、権力への忠実さをたもたせるための仕掛けになる。

パステルナークは、この仕組みのなかで出世するなというのである。だから、彼は、「このいくしみから距離をおけ」ということばで発言をしめくくったのである。

大会には40人の外国人が参加していた。そのなかに日本人がいた。演出家土方与志である。彼は伯爵であったが、ソヴェトの演劇だけでなく、その政治体制に共鳴していた。8月28日に演壇に立った土方与志は、日本のプロレタリア文学の状況を紹介し、官憲の弾圧にふれ、発禁、逮捕について語り、小林多喜二の逆殺を報告した。日本からきた赤い貴族が、「ソヴェト日本」の建設に邁進することを誓って発言をおえると、全員が立ちあがって大喝采をおくり、「革命日本万歳！」の声がおこった。

小林多喜二の拷問死は、この会場にいる者たちにとって、遠い国の出来事ではなかった。これから5年ほどのうちに、この大会の代議員の3人に1人が殺されることになる。

ぬきんでた才能をもちながら、作家同盟誕生のお祝に招かれなかった者がいる。この8月、ロシ

ヤ詩史のモーツアルト、オーシブ・マンデリシタームはヴォローネシに、強烈な個性をもった土俗的詩人ニコライ・クリューエフはトムスクの田舎に、それぞれ流刑人として閉じこめられている。この年の“寛容さ”のおかげで、二人は、流刑囚であってもまだ死刑囚ではなかった。アンナ・アフマトヴァは、創作を禁止され、公的に詩壇から追放されている。生涯に一編の詩も印刷しなかったダニール・アンドレーエフにとって、作家同盟など他人事であった。マリナ・ツヴェターエヴァは、亡命地フランスで極貧の暮らしをしている。

将来、ロシアで真の文学史が書かれたとき、多くのページをささげられることになる「強力な一群」をぬきにして、ソヴェト作家同盟が旗あげしたのである。

(つづく)

注

- 1) 密告が凶器になる状況は、たとえば、アフマトヴァの『鎮魂歌』の第八歌に反映されている。「毒ガス弾」は、密告をあらわすという説がある。
- 2) ヴェルラム・ジャラーモフによれば、内務人民委員部の高官ベルジンは、ロシアではどんな陰謀も密告され、「自発的な密告者」が陰謀のかげりすら知らせてくれるとあって、安心していた。囚人の大群を支配していたベルジンは、自分の経験から、密告をロシア人の特性とみなしていた。
Варлам Шаламов. Колымские рассказы. Книга вторая.
“Советская Россия”. Москва. 1992. с. 217.
- 3) 密告英雄パヴリク・モローゾフという男の子をめぐる一連の出来事は、政治警察の仕わざであることが立証された。
Юрий Дружников. Вознесение Павлика Морозова. Overseas Publications Interchange Ltd. London. 1988.
- 4) アラン・ジョーベール著 村上光彦訳『歴史写真のトリック』朝日新聞社 1989年 79-80頁
Юрий Боров. Сталиниада. “Советский писатель”. Москва. 1990. с. 137-138.
- 5) Стихи о вожде. “Правда”. Москва. 1949. с. 29.
- 6) スターリンの肖像は生きものとしてあつかわなければならないから、肖像にたいするテロ行為という犯罪が成立する。たとえば、こういう事実がある。汽車の運転士リトッスは、機関車にかかづられていたスターリンの肖像がすすで汚れていたので、自腹を切って、大元帥服を着た新しいスターリンの肖像画を買い、元のところにかけた。古いほうは火室へ捨てた。これを助手が党に報告した。しかるべき機関と相談がなされ、テロ行為と認定された。リトッスは25年の刑になる可能性がある。
Владимир Гусаров. Мой папа убил Михоэlsa. “Посев”. Frankfurt am Main. 1978. с. 171.
- 7) Антон-Антонов-Овсенко. Сталин без маски. “Вся Москва”. Москва. 1990. с. 429.
- 8) Семен Бадаш. Колыма ты моя, Колыма...Effect Publishing Inc. New York. 1986. с. 29.
- 9) Ю. И. Чирков. А было все так...“Политическая литература”. Москва. 1991. с. 59-60.
- 10) Сталиниада. с. 139.
- 11) Колымские рассказы. Книга первая. с. 143.
この体験は『法律家の陰謀』に書かれている。
- 12) Колымские рассказы. Книга вторая. с. 217.
- 13) Зарок. “Молодая гвардия”. 1989. с. 155.
- 14) Там же.
- 15) трудовая коммуна
- 16) Литературное обозрение. No. 4. 1991. с. 99.

- 17) アンドレイ・ヤヌアリエヴィチ・ヴィンスキイ (1883-1954) は、オデッサ生れのロシア人で、キエフ大学法学部を卒業した。この文を書いた時の肩書は、ロシア共和国検事、ロシア共和国司法人民委員代理、ソ連邦次席検事であり、ソヴェト司法界の最高峯にいた。1935年から1939年までソ連邦検事 (総長) として、「大粛清」で大役をはたし、後に外務大臣、国連代表となった。法学者として科学アカデミーの会員 (1939年) に選ばれ、スターリンの弾圧に理論的根拠をあたえ、理論と活動との両面でスターリン体制を支えた政治的犯罪者である。
- 18) От тюрьмы к воспитательным учреждениям. Сборник статей под общей редакцией А. Я. Вышинского. Том Первый. “Советское законодательство”. Москва. 1934. с. 9.
- 19) Там же. с. 10.
- 20) Первый всесоюзный съезд советских писателей 1934. Стенографический отчет. “Художественная литература”. Москва. 1934./ Репринтное воспроизведение. “Советский писатель”. 1990./ с. 19.
以下の引用では CO と記す。
- 21) Зоя Масленикова. Портрет Бориса Пастернака. “Советская Россия”. Москва. 1990. с. 37-38.
- 22) CO. с. 235-236.
- 23) CO. с. 235.
- 24) 直訳すれば、「私のそばを通りすぎた」となる。建国の事業にかかわりがなかったとは、強制集団化の宣伝も穀物とりあげの実際行動も囚人労働の讃美もおこなわなかったことを意味する。つまり「乞食」であって、権力機構の端子にならなかったのである。
- 25) CO. с. 236.
- 26) Там же.
- 27) Там же.
- 28) Там же.
会場でオレーシャの発言を聞いたアレクサンドル・グラトコフによれば、聴衆に大きな感動をあたえ、拍手で話しが中断され、ゴーリキイは涙をぬぐい、発言がおわると大喝采がおこった。
Воспоминания о Юрии Олеше. “Советский писатель”. Москва. 1975. с. 267.
- 29) CO. с. 577.
- 30) Там же.
- 31) 1932年10月26日、ゴーリキイの邸宅でスターリン、モーロトフ、カガノーヴィチ、ヴォロシロフ、ポーストコイシェフと作家たちとの懇談があった。この席でスターリンは、作家を「人間の魂の技師」とよんだ。出席していたコルネリイ・ゼリンスキイがその発言の主旨を記録している。
「人間は生活そのものによって改造される。だが、あなたたちが人間の魂の改造を助けなさい。これは重要な生産部門である——人間の魂は。あなたたちは、人間の魂の技師である。」
Вопросы литературы. No. 5. 1991. с. 166.
- 32) CO. с. 578.
- 33) ここでは、正式の共産党員だけでなく、青年共産同盟員をもさす。時代とともに若者のほぼ全員がこの組織に入るようになる。
- 34) ソ連邦英雄は、作家大会の4ヶ月前、1934年4月16日に制定されたソヴェト最高の称号である。ここでは、世界革命が成功した後の「全世界ソ連邦英雄」という称号を想定している。
- 35) CO. с. 650.
- 36) CO. с. 285.
- 37) Там же.
- 38) ブハーリンは、1929年にソヴェトの最高権力機関である党政治局の正局員の地位を解任され、1934年には党中央委員の地位もうばわれ、作家大会の壇上にあったときは、党準中央委員であった。これは、ブハーリンにとって屈辱的な地位であるが、しかし、形式的には指導者集団の末席にとどまっている。まさにこのことが1934年の政治的性格を表現している。

- 39) ラーデクは、トロツキストであった。すでに1926年に党を除名され、1929年に党の路線を認めて復党を許された。かつて反スターリンであったラーデクが演壇に立っているのもこの年の特徴である。彼は、2年後に逮捕された。「モスクワ裁判」では死刑をまぬがれ、10年の刑を宣告されたが、服役中に殺害された。
- 40) 作家大会が終了した翌日、9月2日、作家同盟の理事会の第一回総会がひらかれ、理事会のなかに37人からなる幹部会がもうけられた。議長にはゴーリキイが選ばれた。レフ・カーメネフも幹部会員になった。彼は、この時点では権力を完全に失い、無害な職をあたえられて、スターリンの政治的日程によって最終的処分を保留されていた。カーメネフは、この年の12月に逮捕されている。2年後に銃殺されるカーメネフが、形式的とはいえ作家同盟の最高幹部の名簿にのったことは、ゴーリキイを最大限に利用するための政治的譲歩と擬態との結果である。
- あらゆる潮流と団体を無くして一つの作家同盟にまとめあげ、文学を党と国家の直接的支配におくための象徴的役割が、世界的名声をもつ国民作家ゴーリキイにあたえられた。
- スターリンは、外国に居続けたゴーリキイをやっとのことで呼びもどし、この作家にいわば国賓的待遇をあたえた。ゴーリキイは、政治警察による完全な包囲下で日常生活をおくる。言動はすべて記録され、報告され、手紙は解封されて写しがとられた。ゴーリキイの秘書クリュチコフは、政治警察の一員である。ゴーリキイが視察する施設には、前もって擬装工作がなされ、いわゆる「ボチョムキンの村」がつくられた。ソヴェト作家同盟成立の裏面では、スターリンによるゴーリキイの利用と操作が重要な役割を演じたのである。
- 41) これは、一般的には、非党員を国家権力の下に結集させようとするスターリンの方針のあらわれである。スターリンは、この防げになる極左分子の文学、芸術における活動を封じてから、作家同盟をつくった。後になって代表的な極左分子は銃殺される。
- 42) CO. c. 549.
- 43) Там же.
- 44) Максимилиан Волошин. Россия распятая. “ПАН”. Москва. 1992. с. 201.
この詩（『国家』）は1922年に書かれた。